

■ラフマニノフ／交響曲 第2番 木短調 Op. 27

ラフマニノフが残した3曲の交響曲の中で最もよく演奏されるのが、中期を代表する交響曲第2番である。ピアノ協奏曲第2番の成功ですっかり自信を取り戻した1902年に着想をえて、翌年にはかなりの分量の草稿が書かれたが、一時中断された。

ロシアでは1905年1月に「血の日曜日事件」が起こり、ペテルブルクは騒然としていた。6万人が参加したとも言われるデモ行進は、労働者たちが自分たちの権利を主張して平和的に皇宮へと向かったものだったが、政府に動員された軍隊は彼らに発砲し、多くの死傷者が出た。この事件に対して、ラフマニノフも反政府声明文を新聞に掲載したという。

このような状況を抜け出して、家族とともに移り住んだドレスデンで、交響曲第2番は1906年から7年にかけて完成された。新天地ではこのほか、二短調のピアノ・ソナタや交響詩「死の島」も作曲され、ドイツでの生活も精神状態もきわめて順調だったことをうかがわせる。1908年、ペテルブルクで自ら指揮をして初演した。

ほとぼしるロマンティズムを内包した交響曲第2番は、表層的にはまもなく産声をあげようとしていたシェーンベルク派の無調音楽と対照的な様相を帯びている。しかし、感情のゆらぎにまかせた気ままな音楽では決してなく、波が寄せては返すように感情の高まりと弛緩によって構成するという独特の論理に貫かれていて、しかも循環主題を巧みに用いて統一を図るなど、周到な主題労作がなされている。最も顕著なのはチェロが提示する7音からなる循環モチーフと、ラフマニノフの生涯のモットーともいえるグレゴリオ聖歌「怒りの日」のモチーフ。第1楽章冒頭で提示された後、さまざまなところに形を変えながら織り込まれていく。

全4楽章で、第1楽章はチェロの循環モチーフではじまるラルゴの長い導入部と、ソナタ形式の主部からなる。導入部では循環モチーフのほか、木管とホルンによるゆったりと揺れる主題、ヴァイオリンによる動きのあるモチーフなど、全曲に散りばめられていく要素がすがたをみせる。ヴァイオリンで提示される主部の第1主題も、循環モチーフから紡ぎだされたメロディで、その対旋律としてクラリネットが奏でる楽想は「怒りの日」の輪郭をなぞっている。抒情的な第2主題も音階を順次進行でめぐる循環モチーフから生まれたもの。展開部は波動のように徐々に高まっていき、クライマックスで冒頭の木管とホルンのモチーフに基づく楽想を、金管楽器がファンファーレ風に響かせる。

スケルツォ風の第2楽章アレグロ・モルトは「怒りの日」の変奏による主題で闊達に始まり、モデラートの中間部でも循環モチーフが織り込まれた主題の背後で、「怒りの日」が奏でられている。ヴァイオリンがスラブ風のメロディを弾く第3楽章は、ロシアの抒情が前面に現れ、華やかな美しさをたたえたアダージョ楽章。この楽章の終わりに使われた和声は、当時、書かれた歌曲「心の秘密」作品26の終結部と同じであることから、この楽章は作曲家の最も内面的な感情を吐露したものではないかと言われている。

まるでダンスのようにはじまる第4楽章アレグロ・ヴィヴァーチェはソナタ形式によるフィナーレ。ここでも「怒りの日」と循環モチーフが執拗なまでに用いられている。第1主題、第2主題とも「怒りの日」の変奏と言っている。展開部の直前に第3楽章の主題と循環モチーフが回想され、アダージョの部分では第1楽章導入部のモチーフがよみがえる。再現部ではこれまでの主題やモチーフを駆使しながら、高らかなクライマックスが築かれ、パワフルな躍動感で盛り上がったまま、終結する。

白石 美雪

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。

《楽器編成》

フルート3（ピッコロ持ち替え1）、オーボエ3（イングリッシュホルン持ち替え1）、クラリネット2、バスクラリネット1、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、グロックンシュピール、スネアドラム、バスドラム、シンバル、弦五部

※スコア上の表記